

日本人は、抗日戦争をどう見ているか？（中国軍事パレード批判）

漢和防務評論 20151002 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

漢和防務評論誌の総編集平可夫氏による「日本人の抗日戦争観」を紹介します。平可夫氏は、日本人は、日中戦争で共産軍とまともに戦った記憶がない。実際に戦ったのは、国民党軍で、本当に強かったのは、馬賊、山賊であったと。要するに中国共産党軍は、当時弱体で日本軍と戦える段階になく、日本軍との戦いを避けていたと。同氏は、中国共産党は抗日戦争勝利を祝う資格はないと主張しています。

平可夫

中国で、真に閱兵する資格があるのは誰か？中共の宣伝によると：抗日戦争は、2つの戦場で戦われた、と言う。1つは正面戦場の国民党軍の戦いであり、1つは敵後方戦場での八路軍及び新四軍の戦いである。中共は、2者の戦いは同等の価値があるとしている。しからば日本人は日中戦争をどのように評価しているであろうか。現在、日本で最も権威ある日中戦争の歴史著書は、防衛庁防衛研究所戦史室編纂の「戦史叢書：支那事変陸軍作戦」である。民間の著書も多くあり、代表的な著書は、USUI KATUMI 編纂の2000年「新版日中戦争」(中央公論新社出版)等々である。日本の官民が編集に携わった前記戦史叢書を紐解くと、中国共産党に触れた部分は、基本的に次の5個所だけである。

1. 中国共産党が発表した抗日救国綱領
2. 百団作戦
3. 1943年1月に延安で成立した日本人反戦協会
4. 西安事変

その他の”支那事変”中に出現した戦役の全ての”主役”は、中国軍すなわち国民党軍である。

5. 皖南事変

爆撃作戦について、重要な戦略爆撃は、1940年5月18日から開始された”大本営第101号作戦”である。爆撃目標は、重慶、成都(「新版日中戦争」USUI KATUMI)であり、如何なる日本の文献にも延安を爆撃したことは書かれていない。

百団作戦について：防衛庁防衛研究所戦史室編纂の「戦史叢書：支那事変陸軍作戦」(3)(1975年朝雲出版社出版)は次のように記述している：日本側の損失：最大の損失は独立混成第四旅団であり戦死276人とある。中共方面は、日本軍の死傷20645人(256ページ)とある。衆知の通り、防衛省防衛研究所は一定程度官方の史観を示しており、偽る必要が無い。同書は、日中戦争中の47個の大小戦役を記録して

いる。記録中、盧溝橋及び北平事変から、ZHI（注：草冠に止）江作戦及び湘桂反攻まで中共と関係があるが、記述は百団作戦だけである。中共の言う平行して戦役に関わったとは何を意味するのか分からない。

双方が公表した百団作戦の損害になぜ巨大な差があるのか？読者は分かるはずである。これだけでなく、本誌の判断は次の通り：中共軍が発動した伝統的作戦方式に従えば、まず最初に弱敵を重点的に殲滅する。したがって百団作戦中、真に”大量”殲滅されたのは”偽軍”（注：満軍）である可能性が極めて高い。類似の状況は朝鮮戦争でも発生している。米軍死傷者数の数字は、双方の違いが極めて大きい。志願軍によって殲滅されたのは、多くが韓国軍であり、米軍ではない。両戦争の中国側指導員は彭徳懐である。

ネット上に、「日華事変と陝西省」の日本語論文があるが、主要な出典は2つあり、1つは、防衛庁防衛研究所戦史室編纂の「戦史叢書 18：北支の治安戦」と、他は日本で1983年に出版された「中国研究月報 423号」である。同論文は、百団作戦を次のように評価している：百団作戦は、中共にとって戦略的な失敗であった。皮肉なことに、百団作戦は、中共の言う”平行して戦役に関わった”証拠であり、中共の”抗戦”の唯一の根拠になっている。同論文の以下の観点は極めて興味深い：中共は、百団作戦と日本軍の疲労を利用して攻勢に転じ、延安の整風運動を通じ毛沢東は権威と地位を確立した。1944年4月、党内を完全に支配した毛沢東は、延安会議で百団作戦の総括を行った：すなわち、百団作戦は、一部の党員が行った冒険主義的政策の結果である、と。百団作戦に参加した主力は、旧国府、山西軍出身の党員であり、多数が粛清された。

この考え方は、その後に中共が発動した彭徳懐を粛清する政治運動の根拠となった：彭徳懐の罪状の1つは：過早に百団作戦を発動し、我軍の実力を暴露したとのことである。

上述の日本人の文献は、なぜ、百団作戦の主力は旧国府軍及び山西軍であると記述したのであろうか？防衛庁防衛研究所戦史室編纂の「戦史叢書：支那事変陸軍作戦」(3) (1975年朝雲出版社出版) 中で、次のように説明している：日本陸軍の進攻は、山西省袁錫山の第2戦区軍の陝西省への退却を促した。中共はその後、山西省を根拠地化しようと試みた____。1940年春、中共は山西省に配備された全ての国民党系第97軍を吸収した。八路軍の装備は充実し始め、鉄兜を装備した兵士が明らかに増加した。

この2つの歴史資料を繋ぎ合わせると、百団作戦の主力は、元々国民党の第97軍であることが分かる。

戦争全体を通じて、中共軍の姿勢は、同文献第251ページに次のように記載されている：八路軍は、政治7割、軍事3割を主張し、国民党政権の軍隊と一緒にあって積極的に戦うことはなかった。基本的に日本軍との直接交戦を避けていた、と。

これが日本側の資料に著された内容である。1987年、本誌総編集平可夫は、東京で日中戦争に参加した多くの日本の老兵を取材した。当時、彼らの年齢はすでに70

歳を超えていた。戦争終結後、彼らは自ら事業を起こしたが、当時はすでに第2線に引退し、名義上会長になり子供達が社長になっていた。

多くの被取材者の中で、一人の老兵の子供が次のように述べた：父親から八路軍の名前は聞いたことがある。彼らは一人ひとり大刀を担いでいた、と。その他の全ての老兵は”八路軍”の名前も”新四軍”の名前も知らないと述べ、”共産軍の名前は聞いたことがあるが、交戦したことは無い”と述べた。多くの人は、次のように述べている：本当に強かったのは、馬賊や山賊である、と。日本語の実際の意味は、武装土匪である。

このように見ると、現在中国が自ら撮影している多くの映画に出てくる反共の”土匪”は、すべて抗日出身で、しかも”真に強い”連中となる。

以上